医学部・病院・医学研究科　新執行部発足

令和元年10月1日より、医学部、慶應義塾大学病院、大学院医学研究科において新しい執行部が発足。新執行部の体制を紹介するとともに、医学部長、病院長、医学研究科委員長の就任挨拶を掲載します。

医学部

医学部長補佐
（診療・医学部病院連携担当）
内科学（消化器）教室教授
金井　隆典（67回）

医学部長補佐
（産学連携・広報担当）
整形外科学教室教授
中村　雅也（66回）

医学部長補佐
（研究・学部連携担当）
衛生学公衆衛生学教室教授
武林　亨（68回）

医学部長補佐
（総務・倫理担当）
病理学教室教授
坂元　亨宇（64回）

医学部長
皮膚科学教室教授
天谷　雅行（64回）

医学研究科

医学研究科委員長補佐
（博士課程）
病理学教室教授
金井　弥栄（68回）

医学研究科委員長補佐
（修士課程）
臨床遺伝学センター教授
小崎健次郎（68回）

医学研究科委員長
生理学教室教授
岡野　栄之（62回）

医学部長補佐
（国際連携担当）
薬理学教室教授
安井　正人（68回）

医学部長補佐
（教育・大学院連携担当）
医学教育統轄センター教授
門川　俊明（70回）

医学部長就任の挨拶

次の100年を先導する最高学府の構築

医学部長　**天谷　雅行**（64回）

本年10月1日より、2年間の任期で、医学部長を再任いただきました。2017年に開設100年を迎えた医学部が、次の100年に向けてさらに強くなる基盤を整備、構築し、次世代につなぐことが大きな使命と考えております。

本医学部執行部の基本スローガンは、「塾・医学部・病院一体となる社中協力」と「教育改革」です。念願の新病院棟1号館が開院し、私たちは最新の設備と最適な環境で診療活動を展開させていただいています。一方で、新病院棟建設後に好転が期待されていた財務状況は、厳しい現実に直面しています。消費税増税、働き方改革、その上に減価償却が重なり、大幅な赤字となることが想定されています。しかし、どのような厳しい状況にあろうとも、医学部は慶應義塾を牽引し、新しい知を創成し、世界に情報を発信し続けなければなりません。竹内勤常任理事、北川雄光病院長と情報を共有し、この困難な局面を大きなチャンスに変えて行きます。

組織にとって最も大切な要素は「人」であり、「人を育てる」ことが医学部の次の100年に向けて最も重要な使命です。過去2年間、教授会、オープンフォーラム等での皆さんとの活発な議論を経た「教育改革」は、いよいよ実行のフェーズへと歩みを進めます。多様性を重視し、伸びたい学生を伸ばすカリキュラムの実現へ向けて、日吉、信濃町が一体となって前進します。さらに、教学環境の抜本的改善を図る教育棟建設に向けて、戦略を持って計画を立案していきます。

また、医学を取り巻く環境はダイナミックに進化し、基礎系学問分野はより一層多様化してきています。流動性のある学問の発展に沿って、あるいは、学問の進化に先んじて、新領域を見極め、臨床医学教室と連携し、学生教育に深く関わり、「人を育てる」基礎医学教室の開設、新学術領域の開拓を推進して行きます。

新医学部執行部は、学部長補佐の方々と一枚岩となり、医学部長1期目で手がけた施策を具現化、実装するために全力を尽くしたいと思います。どうぞ、皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

病院

副病院長
（医療安全（管理、教育）、臨床研究監理、診療録管理監査担当）
小児科学教室教授
長谷川奉延（63相当）

副病院長
（医療連携推進、病床稼動管理、働き方改革、病院機能評価担当）
泌尿器科学教室教授
大家　基嗣（66回）

副病院長
（病院運営（外来）、患者サービス、広報、卒後教育担当）
精神・神経科学教室教授
三村　　将（63回）

病院長
外科学（一般・消化器）教室教授
北川　雄光（65回）

病院長補佐
（医療安全、患者サービスを中心とした「病院機能評価」改善推進担当）
精神・神経科学教室准教授
藤澤　大介（77回）

病院長補佐
（医師労務管理・働き方改革推進担当）
内科学（呼吸器）教室教授
福永　興壱（73回）

副病院長
（医療情報システム、AIホスピタル構想推進担当）
放射線科学教室教授
陣崎　雅弘（66回）

副病院長
（病院運営（入院、救急、手術）、国際関連（東京2020対応）担当）
整形外科学教室教授
松本　守雄（65回）

副病院長
（臨床研究（推進、支援、連携）、ゲノム医療担当）
先端医科学研究所　遺伝子制御研究部門教授
佐谷　秀行（60相当）

病院長就任の挨拶

病院長再任のご挨拶

北川　雄光（65回）

この度、2019年10月1日より2期目の大学病院長を拝命致しましたこと、大変光栄に存じております。

昨年、新病院棟1号館への移転が無事完了し、現在は初診・新入院患者数、延外来・入院患者数、病床稼働率、医療収入など医療活動諸指標がかつてない高水準を維持しておりますこと、病院教職員、三四会会員の皆様のご支援に心から感謝申し上げます。

2018年から医療連携強化・病床稼動向上委員会を設置したことにより、教職員の皆様が病院全体や各部門の動向をリアルタイムに把握して様々な対策を講じてくださった結果が明確に現れたものと感謝しております。しかし、病床稼働率がかつてない高水準を維持している今こそ危機管理体制の強化が重要であると考えております。医療安全強化・患者サービス向上に対する不断の努力を怠らず、患者さん中心の安心、安全な医療を堅持して参ります。その上で高度な医療を提供し、新しい医療を開発しながら未来を担う人材を育成するアカデミックホスピタルとしての使命を果たすことで、多くの患者さんに信頼していただけるものと信じております。

2018年2月には全国11施設のがんゲノム医療中核病院に認定され、2019年4月には全国で14施設の地域がん診療連携拠点病院（高度型）に選定されました。がんゲノム医療、再生医療、ハイブリッド手術室や手術支援ロボットを駆使した最先端手術、免疫難病・がん関連新薬を用いた最新医療などに積極的に取り組むことにより、患者さんの期待に応えるだけでなく、未来を担う若手医療者のmotivationを高めることができると考えます。こうした高度な機能を支援する臨床研究推進センターの体制強化、臨床研究監理センターの新設による監理・教育体制の整備により、教職員の皆様が安心して新たな挑戦に取り組める環境を構築して参ります。

昨年、医師の勤務時間管理に基づく診療エキストラ手当の支給を開始したことにより若手医師の激務に少しでも報い、適正な労務管理を行うための第一歩を踏み出すことができました。今後も教職員の健康を守り、勤労に報いるシステムをさらに整えて参ります。

一方、特定機能病院としての機能強化や臨床研究管理体制の厳格化は教職員、特に医師の事務作業負担増に繋がっています。今後も様々な運用ルールを効率化し、適切なタスクシフトを行って参ります。2018年10月には内閣府より全国4施設のAIホスピタルモデル病院に選定され、現在その一環としてさまざまな業務の効率化、自動化に取り組んでいます。教職員の皆様が肉体的にも、精神的にもゆとりを持って患者さんに接し、本来の業務に専念できる環境を整備して参ります。

今回の病院長再任に際しましては、全力で担当分野に注力して下さっている6人の副病院長には皆様再任をお願い致しました。また、将来病院運営を支えてくれる次の世代の人材を育成する目的も含めて福永興壱教授（医師労務管理・働き方改革担当）、藤澤大介准教授（医療安全、病院機能評価担当）に病院長補佐に就任していただき、現場感覚で大きな改革に取り組んでいただくことといたしました。医学部・病院の次の100年に向かって、真のアカデミックホスピタルとしての未来像を現実のものにするために努力して参ります。皆様のご支援、ご指導を何卒よろしくお願い申し上げます。

医学研究科委員長就任の挨拶

医学研究科委員長を拝命しまして

岡野　栄之（62回）

この度令和元年10月1日より、医学研究科委員長を拝命した岡野栄之であります。重任でありますが、また新たな気持ちで取り組んでいきたいと思っております。

博士課程につきましては、これまで、5専攻制から2専攻制への改組を経て、入学充足率の劇的な向上、1学年あたり68名から80名への定員の増員、学費の値下げなどの改革を行い、現在では春・秋いずれの学位授与式における博士の学位授与数も最も多い学内最大の規模となりました。また、履修内容審査報告のチェック制度の導入、履修内容審査及び学位審査時における実験ノートのチェック、大学院特別講義の英語化と専門別体系化、CITIESなどの導入と倫理教育の充実化を行い、学位授与式では毎回のように、学位論文として提出されたCell, Natureなどのトップジャーナルの掲載論文の筆頭著書が学位記受領総代を務めるなど、質的にも大きな改善を行いました。最近では、Broad Institute of Harvard and MIT, Washington University (St. Louis), Karolinska Institute, Gladstone Institute, Buck Institute of Agingなどの世界のTop Instituteと医学部・医学研究科の連携協定を結び、大学院生の武者修行の場が大きく広がりました。また、全塾のスーパー・グローバル事業を活用し、海外のトップレベルの研究者を特別招聘教授としてお招きし、大学院生の指導や学位審査に携わる機会を構築しました。

これまで入学志願者の減少が続いた修士課程につきましても、経営管理研究科や政策・メディア研究科にも大きく協力いただき、アントレプレナー育成コースという新しいコースを2020年度入学者より始めることにし、鋭意準備を進めております。本コースもおかげさまで非常に多くの方々に興味を持っていただいております。今後は、これらの取り組みをもっとbrush upし、国際的にも魅力的な大学院にして行きたいと考えております。一方、大学院生の専修医や初期研修医との両立を大学としてどのように管理・サポートすべきか？さらには、MD-PhDコースを如何にパワーアップさせるか？などの山積するIssuesについても、課題解決に向け最大限の努力をする所存であります。

どうぞ、皆さま、ご指導・ご鞭撻の程、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

三四会新病院棟建設協力者銘板のお知らせ

新病院棟1号館の完成を記念して多大なご貢献を頂きました個人・団体・法人を顕彰し、1階ホスピタルモールに銘板が2019年3月に設置されました。募金活動は当初、慶應義塾創立150年記念事業募金として2005年から5年間にわたる募金活動が行われましたが、その後に2013年より医学部創立100年記念新病院棟建設事業募金として改めて開始された経緯があります。150年記念事業募金につきましては、すでに三田・日吉キャンパス内に銘板が設置されております。しかし全募金期間を通して新病院棟建設に対する多大なご貢献を賜りましたが、既に設置された信濃町の銘板に掲出されておられない方々に対して、心からの感謝の意を表し、三四会が新たな銘板を作成して信濃町（三四会内）に顕彰することにいたしました。現在確認の作業のためのご案内をお送りしております。内容をご確認の上、ご返送をお願い申し上げます。

慶應義塾大学医学部三四会
新病院棟建設募金事務局
お問合せ先　TEL／FAX　03-3356-5568
（電話受付：平日10:00～16:00）

慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211　内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

鑑賞知来

東京の喧騒を離れ、ニューヨークの混沌に身を置いて、早3年。この夏、米国の内科レジデンシーを修了するに当たり、2年連続『ベストレジデント』として表彰される栄誉に預かった。

医学部でも初期研修でも、優秀な上、努力家で志の高い、素晴らしい先輩・同僚に囲まれ切磋琢磨したことが、私がアメリカで戦っていく基盤となった。初期研修後に渡米し、文字でしか見たことがなかった嚢胞性線維症や鎌状赤血球、ヘロイン・コカインのドラッグ中毒者など、日々、想像を超える多種多様な患者さんの診療にあたった。ニューヨーカーのマシンガンのような英語に圧倒されつつも、毎日が新しい学びに溢れていた。

ただ、高額すぎる医療費など保険システムの破綻のみならず、専門性を追求するあまりに過度に細分化された医療対価の代償を患者さんが払うことは明白である。守られた労働環境の反面でシフト制勤務による責任感・達成感の軽薄化など、日本とは全く正反対の課題が浮上しているのは興味深い現実だった。

シャイでアピール下手な日本人は海外で評価されづらい。しかし、このたび最優秀賞を受賞し、肌の色も、生まれ育った環境も、何もかもが異なるような異国の地でも、目の前の仕事に真摯に取り組む態度、日本人特有の生真面目さ・きめ細やかな丁寧さはきちんと評価されることを再認識でき、心から嬉しかった。

もちろん、アメリカ人に負けないよう、語学力も学生時代から人一倍力を入れてきた自負はある。しかし、同僚たちに最も評価されたのは、英語の発音の良さではなく、日々心を込めて患者さんに向き合っている姿だったと思っている。

日本を外から見て、日本、そして日本の医療者は本当に素晴らしいと改めて感じるが、世界一の少子高齢化社会である本国は課題が山積みだ。是非、慶應の同僚や後輩には、知見や視野を広げるためにも勇気を持って海外に飛び出していってほしい。

（マウントサイナイ医科大学（ニューヨーク）　百武美沙　93回）